

板碑造立への享徳地震の影響

佐々木 淳

§1. はじめに

享徳3年(1454)11月23日夜半、奥州において大地震があり、津波が襲い、多くの人引き波にさらわれたとされる。昨年の歴史地震研究会においてこの享徳地震の津波の犠牲者の供養碑である可能性が非常に高い板碑が石巻市に2基、隣接する女川町に1基あることを報告した。

板碑は、中世の卒塔婆であり、古文書・古記録の少ない東北地方の中世において貴重な史料となりえるものである。そして、石巻市とその周辺地域においてその造立数の傾向を調査し、享徳地震の津波が地域社会に大きな影響を与えている可能性が高いと考えられることを報告したい。

§2. 対象地域とその区分

本報告の対象地域とその区分は次のとおりとする。

1. 対象地域

旧河南町を除く石巻市、女川町、南三陸町

2. 区分

- ① 旧石巻市の内湊地区及び鹿妻地区(葛西氏領)
- ② 旧石巻市の内稲井地区(葛西氏領)
- ③ 旧桃生町・旧河北町の内大川地区を除いた地域(山内首藤氏領)
- ④ 旧河北町の内大川地区(山内首藤氏領)
- ⑤ 旧石巻市荻浜地区・旧雄勝町・旧牡鹿町、女川町(遠島と呼ばれ得宗領であったとされる)
- ⑥ 南三陸町(本吉荘(郡))

この対象地域とその区分は、本報告の対象である板碑が、享徳地震発生後の1454年頃まで造立されていた地域で板碑の悉皆調査報告があり、かつ沿岸部であることである。そして同じ領主であれば、津波の影響があった可能性が高い地域と津波の直接的な影響がなかった可能性が低い地域とに分けたものである。そして、①・②は鎌倉期から一貫して葛西氏領、③・④は鎌倉期から一貫して山内首藤氏領、⑤は鎌倉期が得宗領、南北朝期以後は葛西氏ないし山内首藤氏が横領したと考えられる地域、⑥は平安期が撰関家領のち後白河院領、鎌倉期以後は関東御家人領(千葉氏・熊谷氏か)となり、室町期までには、その御家人が葛西氏の被官となっていたと考えられる地域である。

§3. 検討の内容

対象地域の板碑の造立数を集計し20年ごとの度数分布表及び棒グラフを作成した。その結果、六つの対象地域は二つのグループに分けられることが判明

した。

一つは、南北朝期から室町前期にかけてピークを迎え、室町中期に向かって減少し、1455年から1474年の間、まったく板碑が造立されない地域である。

もう一つは、南北朝期から室町前期にかけて第一のピークを迎え、いったん造立数が減るものの、1455年～1474年に再度のピークを迎える地域である。

前者は、①・④・⑥、後者は②・③・⑤の地域である。ここでの際立った違いは1455年から1474年間の20年間の造立数である。①・②と③・④は、前述のとおりの領主で同じ文化を共有していたと考えられるが、板碑の造立数に大きな違いがある。この違いは、享徳地震の津波の影響があった可能性が高い地域と少ない地域であり、②・③は津波の影響が少なく、板碑造立の習慣が残り、①・④は津波の被害により地域社会が大きな影響を受け、板碑造立が文明年間まで止んでしまったと考えられるのである。

残る⑤・⑥の地域であるが、まず、⑥については①・④と同様に沿岸部であることから津波の影響により地域社会が大きな被害を受け、板碑造立が文明年間まで止んでしまったためと考えられる。

しかし、⑤の地域はリアス海岸で津波の影響があった地域にもかかわらず、板碑造立は継続されている。この点については、この地域が元々は得宗領であったことから宗教文化が違っていた、あるいは、リアス海岸であることから、集落が高台にあり津波の影響が少なかったなどが考えられるが、今後の課題としたい。

§4. おわりに

以上の検討から鎌倉期以後一貫して葛西氏領・山内首藤氏領であった地域においては、享徳地震の津波が襲った1454年末以後、20年以上にわたって板碑の造立が途絶えたことから、享徳地震の津波は、地域社会に大きな影響を与えたと考えられる。

文献

- 石巻市史編さん委員会、1992、石巻の歴史第8巻
河北地区教育委員会、1994、北上川下流のいしぶみ
宮城県教育委員会、1999、海蔵庵板碑群
雄勝町教育委員会、1994、雄勝町の板碑
桃生町教育委員会、1999、桃生・山内氏と板碑
牡鹿町誌編纂委員会、2005、牡鹿町誌中巻
女川町教育委員会、2001、女川町の板碑
志津川町誌編さん委員会、1991、志津川町誌資料集2